

〈論文〉『源氏物語』の雨：「予告」と「知らせ」の仕掛け

莫, 泊因

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

103

(開始ページ / Start Page)

38

(終了ページ / End Page)

52

(発行年 / Year)

2021-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025431>

『源氏物語』の雨

——「予告」と「知らせ」の仕掛け——

莫 泊因

はじめに

『源氏物語』における「雨」の用例は非常に多く、合計三十四例に及ぶ¹⁾。さらに、「長雨」「五月雨」など、「雨」を含む語彙は、『源氏物語』には合計九十六例ある。

『源氏物語』の雨について、これまでの研究は、主に景情一致の視点から、微視的な考察をおこなってきた²⁾。しかし、『源氏物語』の雨は、作中人物の心情と照応する無機的な自然風景だけではなく、物語の構造と有機的に関わる表現の仕掛けでもある。本論は、作劇法の一翼を担う雨の側面を取り上げ、随所に設置された雨が、物語をどのように構築しているかを検証していく。

第一節 「賢木」「須磨」「明石」巻の雨

周知のごとく、「須磨」巻から「明石」巻までの光源氏の須磨流離譚は、雨と深く関連している。光源氏が正式に須磨へ放逐されたのは「須磨」巻であるが、放逐のきっかけが描かれたのは「賢木」巻である。

「賢木」巻で、光源氏と朧月夜の密会は右大臣に見つかった。これは光源氏が須磨へ追放される契機となる。密会が発覚した夜に、雨が降り出した様子が描かれている。

雷鳴りやみ、雨すこしをやみぬるほどに、大臣渡りたまひて、まづ宮の御方におはしけるを、村雨の紛れにて、え知りたまはぬに、軽らかにふと這ひ入りたまひ

て、御簾ひき上げたまふままに

(賢木 一四四頁)

村雨の音に紛れて、右大臣は気付かれずに朧月夜のところに入り、光源氏と朧月夜の密会を発見した。この時、雷がすでに鳴りやんでいいるため、もし村雨が降っていなければ、右大臣が警戒されずに密会の場所に入ることは不可能だっただろう。村雨が降っているからこそ、右大臣が二人の密会を発見することができたのである。その後、二人の關係に激怒した右大臣は弘徽殿太后とともに光源氏の放逐を画策した。間接的ではあるが、密会した二人の關係を右大臣に知らせたのである。換言すれば、光源氏の須磨流しは、この村雨で触発されたと言えよう。

ここで一つ注意しなければならぬのは、光源氏と朧月夜の逢瀬が読者にとっては既知のことだが、作中人物の右大臣にとっては新しい情報であるということだ。すなわち、この村雨は、読者が知っているが作中人物には知られていない情報を告知するという「知らせ」の性質を持っているのである。

光源氏が須磨へ旅立った後の三月朔日に、いきなり暴風雨が降り出した。

　　眩笠雨とか降りきて、いとあわたたしければ、みな帰
りたまはむとするに、笠も取りあへず。さる心もなき

に、よろづ吹き散らし、またなき風なり。波いといかめしう立ちきて、人々の足をそらなり。海の面は、袞を張りたらむやうに光り満ちて、雷鳴りひらめく。(中略) なほやまず鳴りみちて、雨の脚、当たる所徹りぬべくはらめき落つ。かくて世は尺きぬるにやと心細く思ひまどふに、君はのどやかに経うち誦じておはす。暮れぬれば、雷すこし鳴りやみて、風ぞ夜も吹く。(中略) 暁方みなうち休みたり。君もいささか寝入りたまへれば、そのさまとも見えぬ人来て、「など、宮より召しあるには参りたまはぬ」とて、たどり歩くと見るに、おどろきて、さは海の中の竜王の、いといたうものめでするものにて、見入れたるなりけりと思すに、いとものむつかしう、この住まひたへがたく思しなりぬ。

(須磨 二一八頁)

この土砂降りの中で、「そのさまとも見えぬ人」が光源氏の夢に現れ、なぜ参上しないのかと光源氏を問いたです。この人は「海の中の竜王」だと光源氏が思ったが、結局「須磨」巻ではその正体が明かされることはなかった³。暴風雨が降った巳の日に、夢に現れた正体不明の人物から、光源氏が「宮より召しある」と告げられ、須磨での暮らしを堪えがたく思うようになった。「宮」について、「住吉の神殿」や「現世の朝廷」など、幾つかの解釈が可能であろうが、

引用した文章からは判断できない。⁽⁴⁾ いずれにせよ、「須磨」巻末の雨とともに、光源氏がこれから須磨から離れるという予告が行われるのである。

いきなり降り出し、また雷を伴うという点から見れば、「須磨」巻末の雨は、光源氏と朧月夜の逢瀬が発覚した時の村雨と類似しており、二つの雨は互いに呼応していると思われる。

「明石」巻に入ってもなお、須磨での暴風雨が続く。さらに、光源氏は紫の上の手紙から、京でも同じく豪雨が降っていることを知る。

(紫の上)「あさましく小止みなきころのけしきに、いとど空さへ閉づる心地して、ながめやる方なくなむ……」

(明石 一二四頁)

背景として須磨の雨と呼応する京の雨を設置することによって、「明石」巻の天変地異の伏線が張られているのだ。須磨での暴風雨が止んだ直後、桐壺院の霊が現れ、住吉の神の導きに従って明石に移動するよう光源氏に指示した。さらに、桐壺院は、須磨の状況を帝に奏上するという予告を言い残し、姿を消した。光源氏はその指示に従い、須磨の渚へ移動した。これで須磨の雨が終結した。渚で待っていた明石の入道は、光源氏に次のように言った。

(入道)「去ぬる朔日の夢に、さまことなる物の告げ知らずることはべりしかば、信じがたきことと思うたまへしかど、『十三日にあらたなるしるし見せむ。舟をよそひ設けて、かならず雨風止まばこの浦に寄せよ』とかねて示すとはべりしかば、こころみに舟のよそひを設けて待ちはべりしに、いかめしき雨風、雷のおどろかしはべりつれば、他の朝廷にも、夢を信じて国を助くるたぐひ多うはべりけるを、用ゐさせたまはぬまでも、このいましめの日を過ぐさず、このよしを告げ申しはべらんとて、舟出だしはべりつるに、あやしき風細う吹きて、この浦に着きはべりつることまことに神のしるべ違はずなん。ここにも、もし知ろしめすことやはべりつらんとてなむ。いと憚り多くはべれど、このよし申したまへ」と言ふ。

(明石 一三三―一三三二頁)

この「さまことなる物」の正体は、この前にある桐壺院の発言から、住吉の神と推測される。入道が夢を見た朔日に雨がすでに降っているかどうかはわからない。また、「十三日にあらたなるしるし見せむ」と告げられても、入道は「しるし」の意味を理解できなかった。しかし試みに舟を出したところ、異国でも夢を信じて国を助ける例を思い出し、国の安寧と関わる夢だったと悟った。傍線部の「おど

ろかしはべりつれば」があるため、ここの雨も「知らせ」の雨と言うことができる。

入道が光源氏を迎えた日に、京にいる朱雀帝は、夢で桐壺院の幻を見た。

三月十三日、雷鳴りひらめき雨風騒がしき夜、帝の御夢に、院の帝、御前の御階の下に立たせたまひて、御気色いとあしうて睨みきこえさせたまふを、かしこまりておはします。聞こえさせたまふことも多かり。源氏の御事なりけんかし。いと恐ろしういとほしと思して、後に聞こえさせたまひければ、「雨など降り、空乱れたる夜は、思ひなしなる」とはさぞはべる。軽々しきやうに、思し驚くまじきこと」と聞こえたまふ。

(明石 二五二～二五三頁)

これをきっかけに、朱雀帝は光源氏の追放を過ちだと悟り、光源氏の召還を決意した。これ以降「明石」巻には雨の記述がない。「須磨」・「明石」両巻を跨ぐ雨がこれで完結すると見られる。光源氏の須磨流しは、「賢木」の村雨から始まり、「明石」巻における京の雷雨で終わりを告げ、まさに一つの「閉回路」のような構造を呈している。「閉回路」は、スイッチが閉じていて電流が流れる回路のことを指す電気工学の用語である。設置された一連の雨は回路をなし、電気を輸送するようにストーリーを展開させてい

くと思われる。

「須磨」・「明石」巻の一連の出来事を時系列で整理してみると、

【1】三月朔日の巳の日、須磨で暴風雨が降り出し、光源氏は夢で得体の知れない人を見て、「なぜ参上しない」と問いただされる。

【2】三月朔日に、「さまことなる物」が明石の入道の夢に現れ、「十三日にあらたなるし見せむ」と告げる。

【3】光源氏は紫の上の手紙から、京でも暴風雨が発生していることを知る。

【4】三月十三日の夜明け前、須磨での豪雨が静まり、故桐壺院の霊が出現し、光源氏に住吉の神の導きを伝え、朱雀帝に奏上すると言い残す。

【5】三月十三日の暁方、光源氏は明石の浦にて入道に迎えられる。入道は光源氏に、迎えるまでの経緯を語る。

【6】三月十三日、京ではなお雨が騒がしく降っている。朱雀帝は夢で桐壺院を見て、院から光源氏についてさまざまなることを注意され、光源氏の召還を決意する。

という順になる。雨が降るたびに、必ず「予告」か作中人物に対する「知らせ」が行われると見て取れる。ここで押さえておくべきなのは、「賢木」巻を含めて、光源氏の須磨流しにまつわる雨が一貫して雷を伴う雨という点である。作者は、同じ類型の雨を綿密に設置することによって、一

つの「閉回路」を作り、物語を構造的に組み立てていていると思われる。

第二節 「末摘花」「蓬生」巻の雨

『源氏物語』における雨は、予告が行われるシグナルだけではなく、場合によって読者に前の場面を想起させる装置でもある。その一例として、「末摘花」巻と「蓬生」巻の雨が挙げられる。

「末摘花」巻で、光源氏が二条院に帰り、後朝の文を夕方にも摘花のところへ遣わすところで、雨が降り出した。

かしこには文をだにといとほしく思し出でて、夕つ方ぞありける。雨降り出でて、ところせくもあるに、笠宿せむとはた思されずやありけむ。

(末摘花 二二八六頁)

『新編日本古典文学全集』の頭注によると、後朝の文は翌朝早く送るべきだったが、光源氏がそれを夕方にしたのは、末摘花への熱意の無さからであるという。さらにその後、光源氏は末摘花の返事を見ると、「見るかひなう」思つてそこに置いてしまふ。

紫の紙の年経にければ灰おくれ古めいたるに、手はさ

すがに文字強う、中さだの筋にて、上下ひとしく書いたまへり。見るかひなううち置きたまふ。いかに思ふらんと、思ひやるもやすからず。かかることを悔しなどはいふにやあらむ、さりとていかがはせむ、我はさりととも心長く見はててむと思しなす御心を知らねば、かしこにはいみじうぞ嘆いたまひける。

(末摘花 二二八七頁)

しかしこのように気分を悪くしても、光源氏はなお「我はさりととも心長く見はててむ」と、すなわち引き続き最後まで末摘花の世話をしたいと思つている。ここで注目したいのは、この時点で末摘花は、光源氏のその気持ちをまだ知らないことである。末摘花がそれを知ったのは、後の「蓬生」巻だ。

「蓬生」巻で、末摘花は荒れた常陸宮邸で困窮な暮らしをしていたが、雨が降っている夜に、光源氏が常陸宮邸のそばを通りかかり、末摘花が待ち続けていたことを知った。

卯月ばかりに、花散里を思ひ出できこえたまひて、忍びて、対の上に御暇聞こえて出でたまふ。日ごろ降りつるなごりの雨すこしそそきて、をかしきほどに月さし出でたり。昔の御歩き思し出でられて、艶なるほどの夕月夜に、道のほどよろづのこと思し出でておはするに、形もなく荒れたる家の、木立しげく森のやうな

るを過ぎたまふ。

(蓬生 三四四頁)

「夕月夜」という表現から、この雨は、「末摘花」巻の雨と同じく、夕方に降る雨であると推測できる。「蓬生」巻の雨は、「末摘花」巻の雨と連動しており、「我はさりともし心長く見はててむ」という光源氏の気持ちを読者に想起させていると思われる。また、上述したように、「末摘花」巻の時点では、末摘花は、最後まで自分の世話をしたいという光源氏の気持ちを知らないが、読者はそれを知っている。「蓬生」巻で、光源氏は常陸宮邸を通りかかるまで、末摘花がそこで待ち続けていることを知らなかったのだが、読者はもちろんそれを知っている。「蓬生」巻の雨も、読者にとってすでに知られている事実を、はじめて新情報として作中人物に知らせる雨であると思われる。

第三節 「少女」「野分」「藤裏葉」巻の雨

「少女」巻では、夕霧と雲居雁の恋愛関係が内大臣に知られる一部始終が描かれる。内大臣が大宮邸に参上し、大宮と語っている間に夕霧が訪れてきた。忍んで大宮邸を出た後、内大臣は女房たちの内緒話を耳にし、夕霧と雲居雁の仲を知らされた。その日に時雨が降っている描写が見られる。

所どころの大饗どもも果てて、世の中の御いそぎもなく、のどやかになりぬるころ、時雨うちて萩の上風もただならぬ夕暮に、大宮の御方に内大臣参りたまひて、姫君渡しきこえたまひて、御琴など弾かせたまつりたまふ。

(少女 三四頁)

夕霧と雲居雁の仲について、掲げた一節の直前に詳しく書かれている。この雨に伴い、読者にとって既知である二人の関係が、初めて内大臣に知られてしまうのである。

「野分」巻で、夕霧が光源氏と紫の上の寝所の近くに来て、後に光源氏と対面した。ここにも、降雨の描写が見られる。

暁方に風すこししめりて、むら雨のやうに降り出づ。「六条院には、離れたる屋ども倒れたり」など人々申す。風の吹き舞ふほど、広くそこら高き心地する院に、人々、おはします殿あたりにこそ繁けれ、東の町などは、人少なに思されつらむ、と驚きたまひて、まだほのほのとするに参りたまふ。道のほど、横さま雨いと冷やかに吹き入る。

(野分 二七〇頁)

風を伴う一頻りに降った雨は、「少女」巻の時雨と呼応

していると思われる。夕霧と対面した後、光源氏は教訓らしき発言をした。

(源氏)「いまいくばくもおはせじ。まめやかに仕うまつり見えたてまつれ。内大臣はこまかにしもあるまじうこそ、愁へたまひしか。人柄あやしうはなやかに、男々しき方によりて、親などの御孝をも、いかめしきさまをばたてて、人にも見おどろかさむの心あり、まことにしみて深きところはなき人になむものせられける。さるは、心の隈多く、いと賢き人の、末の世にあらるまで才たぐひなく、うるさながら、人としてかく難なきことは難かりける」などのたまふ。

(野分 二七二頁)

『新編日本古典文学全集』はこの発言について、「夫婦の睦言を立ち聞きされたと感じたであろう源氏は寢室を出ると、もったいぶって父親顔で夕霧に教訓する。夕霧に与えるその印象を作者は計算しているであろう」と解釈している。しかしながら、作者が光源氏に、内大臣に関する発言をさせたのは、夕霧に与える光源氏の印象を計算しているだけではなく、上掲の「少女」の一節と「藤裏葉」巻に描かれた二人が和解する場面との連動を考慮しているのだ、と思われる。『日本国語大辞典』によると、「心の隈」は、「人に知られない心の奥底。心のすみずみ。また、人知れ

ず抱いている考え」の意である。また、「心の隈」に「多く」が付いているため、人には察知できない内大臣の考えが複数あるとうかがえる。雲居雁を東宮妃に立てようとするという考え（「少女」巻）と、讓歩して夕霧と和解を求めるとの発言には、すでに内大臣と夕霧の和解についての示唆が潜在していると考えられる。

「藤裏葉」巻で、これまで夕霧に話しかけることを憚ってきた内大臣は、大宮の法事の日に、夕霧に声をかけ、和解を求めた。

夕かけて、みな帰たまふほど、花はみな散り乱れ、霞たどたどしきに、大臣、昔思し出でて、なまめかしううそぶきながめたまふ。宰相もあはれなる夕のけしきに、いとどうちしめりて、「雨気あり」と人々の騒ぐに、なほながめ入りてゐたまへり。心ときめきに見たまふことやありけん、袖を引き寄せて、(下略)

(藤裏葉 四三三頁)

「雨が降りそうだ」と騒いでいる人々の中で、夕霧はほんやりとした面持ちをしている。夕霧の表情に気持ちをかされ、内大臣は夕霧に話しかけてみた。間接的な原因でありながら、降ってきそうな雨の模様は、内大臣と夕霧の和解をもたらしたと言えよう。

内大臣から話しかけられたのは、夕霧にとって予想外のことだった。一方、直前に内大臣の和解の意思が書かれているため、夕霧に和解を持ちかけるのは、読者にとって想定内のことである。

心あわたたしき雨風に、みな散り散りに競ひ帰りたまひぬ。君、いかに思ひて例ならず気色ばみたまひつらんなど、世とともに心をかけたる御あたりなれば、はかなきことなれど耳とまりて、とやかうや思ひ明かしたまふ。

(藤裏葉 四三三～四三四頁)

ここの雨は「少女」巻及び「野分」の雨と同じく、風を伴う一頻りに降る驟雨である。傍線部の「いかに思ひて例ならず」は、夕霧の驚きを表しており、「野分」巻の「心の隈」と忠実に連動している。夕霧、雲居雁、内大臣の三人に纏わる物語は、雨の日に始まり（夕霧と雲居雁の仲が内大臣に発見される）、雨の日に節目を迎え（内大臣と夕霧との和解が暗示される）、雨の日に決着がつく（和解が達成される）。これも光源氏の須磨流しと同じく、一つの閉回路の様相を表していると思われる。

第四節 宇治十帖の雨

宇治十帖の浮舟物語も、雨と切り離せない密接な関係を持っている。浮舟物語の雨がどのような機能を果たしているかについて、原岡文字氏と三田村雅子氏の論考がある。原岡氏は、浮舟物語における雨を「清めの雨」と解釈し、次のように述べた。

罪を負って川に流される「人形」浮舟の在り方は、もとより直接には宇治川入水体験によって完遂される。「水」の清めの力が、浮舟の罪を洗い流す。と同時に浮舟物語に執拗にまつわる「雨」もまた、「水」に繋がるイメージを負って、薫との出逢いの当初より「なでもの」の運命を暗示し、やがて川と共にすべてを押し流す滔々たる力となって、その入水、贖罪を導いたと言えるのではないか。露顕、苦惱、そして失踪のすべての背後には、晩秋の長雨が降り注いでいる。

すなわち、浮舟物語の雨は、宇治川と共に浮舟の罪を清める力を構成する雨であると原岡氏は主張した。しかし、浮舟は入水を図ったものの、結局入水を果たせず、大木の下で行き倒れている状態で横川僧都に発見された。つまり、浮舟の身体は宇治川と接触できていないのである。また、

「手習」巻の本文から、浮舟が発見された時に雨が降っているのか、浮舟の身体が濡れているのかに関する記述が全く見当たらないため、雨と浮舟の身体との接触も確認できない。接触が確認できないにもかかわらず、浮舟の罪を「洗い流す」と考えて良いのか、疑問に思わざるを得ないところである。さらに言えば、原岡氏は「入水、贖罪を導いた」と結論付けたが、どこの雨がどのようなルートで、浮舟を入水そして贖罪へ導いたのか、さらなる説明が求められる。一方、三田村雅子氏は、浮舟物語の雨を「隠されていたものを顕在化させる物語内の装置」と見て、下記のように述べた。

浮舟物語における「水」は、当初泉川の「増水」のように、東屋の降り来るのように、さりげなく配置されるが、物語の進み行きに伴って、次第に浮舟その人の内面と関わり、同調していくうねりを獲得していく。自然が心に同調するというよりも、心が自然と同調・共振し、外界と内界の境目がなくなり、ついには外界のなだれこみとしての入水の企てに発展して行くのである。

何を顕在化させるかといえ、隠されていた浮舟の心の波動を顕在化させるというのであろう。これは「景が情に一致している」と言うより、「情が景に一致している」と

言うほうがふさわしい。つまり、人物の心情が主導的な立場にある風景に牽引されながら受動的に同調する「情景一致」である。だが、二人の使いが鉢合わせした日の雨など、「情景一致」では解釈できない雨もある。

浮舟物語の雨は、「清めの雨」でも「情景一致」の雨でもない。ではその雨はどのような雨なのか。なぜ雨が設置されるのか。

浮舟物語における雨は、三段階に分けられる。第一階段は、浮舟が出奔する前、宇治にいる時の雨。第二階段は、浮舟の失踪前後の雨。第三段階は、浮舟が失踪し、小野に移された後の雨である。本節では、主として浮舟の失踪に関わる雨を取り上げ、浮舟物語に設置された雨の機能を明らかにしていく。

■浮舟が出奔する前の雨

まず第一段階の雨から見よう。「浮舟」巻に、匂宮と薫双方より浮舟のところへ文が届く場面がある。文が届いた日には、雨が降り続いていた。

雨降りやまで、日ごろ多くなるころ、いとど山路思し
絶えてわりなく思されければ、親のかふこはとこそせ
きものにごそと思すもかたじけなし。

(浮舟 一五七頁)

この雨は、一見何の変哲もない晩春の風景だが、雨が降ったこの日の出来事は、浮舟の入水を触発したと思われる。後日、匂宮と薫の使者が同時に浮舟のところにやってきた。

殿の御文は今日もあり。なやましと聞こえたりしを、いかがととぶらひたまへり。(中略)宮は、昨日の御返りもなかりしを、「いかに思し漂ふぞ。風のなびかむ方もうしろめたくなむ、いとどほれまさりてながめはべる」など、これは多く書きたまへり。

雨降りし日、来あひたりし御使どもぞ、今日も来たりける。殿の御隨身、かの少輔が家にて時々見る男なれば、(隨身)「まうとは、何しにここにはたびたびは参るぞ」と問ふ。

(浮舟 一六九～一七〇頁)

「殿の文は今日もあり」とあるため、この日は上掲の「雨降りやまで」の日とは別であることがうかがえる。また、「なやましと聞こえたりし」は前文に記述がないため、「雨降りやまで」の日から、少なくとも二日以上経過していることになる。また、「宮は、昨日の御返りなかりしを」より、このころ浮舟に薫・匂宮両方から手紙が寄せられていると推測される。すなわち、薫・匂宮の使者たちは、浮舟のところに複数回来ているということである。

しかし、両方の使者が顔を合わせたのは、「雨降りやまで」の日だけだ。この日、薫の使者である隨身は匂宮の使者を見て不審に思い、童に使者を尾行させた。これで匂宮と浮舟の関係が薫に知られてしまい、薫が浮舟を詰問することになった。薫の詰問に強い恐怖を感じた浮舟は、ついに入水を決意してしまう。浮舟が入水する遠因は、「雨降りやまで」の日の出来事にあると言えよう。

「雨降りやまで」の日に、浮舟はそれぞれに匂宮と薫に返歌を贈った。匂宮への返歌は、

かきくらし晴れせぬ峰の雨雲に浮きて世をふる身をも
なさばや

(浮舟 一六〇頁)

であり、薫への返歌は、

つれづれと身を知る雨のをやまねば袖さへいとどみか
さまさりて

(浮舟 一六一頁)

であり、その後「まじりなば」と書き足されている。この二首の歌に、すでに浮舟の運命の行方に関する重大な暗示が潜んでいると思われる。

匂宮への返歌について、本居宣長は『源氏物語玉の小櫛』

で「雲になさばやといふは、雲は行へもなく、きえうする物なる、そのごとく、身も、ゆくへなく、消うせなばやといふ也」と説いた。だが、ここに注目すべきなのは、雲でもなく、雨のほうであると思われる。後述に譲るが、句宮から見れば、浮舟は雨の中で失踪し、姿を消したのである。これは返歌の「雨雲に浮きて」と後ろにある「まじりなば」と符合する。

薫への返歌について、『伊勢物語』第一百七段及び在原業平の「かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる」との関連性が指摘されているが、ここでは詳述しない。返歌にある「身を知る雨」は、比喩的に涙を指していると解せるが、この返歌は、浮舟が目の前に降り続けている雨に即して詠んだ歌である。したがって、「身を知る雨」という表現は、まず最初に、自然風景としての雨と解すべきであろう。後述するが、この「身を知る雨」は、「手習」巻で浮舟の所在が明かされた時の「雨など降りしめやかな夜」と呼応していると思われる。

物語の最後まで浮舟の行方を知らない句宮から見れば、雨の日に失踪した浮舟は雨の中に姿を消し、行方不明になってしまったのだ。これは句宮への返歌にある「雨雲に浮きて世をふる身もなさばや」と一致する。一方、薫は「手習」巻で、「雨など降りしめやかなる」夜に、明石中宮とその女房から浮舟生存の情報を得る。薫にとって、この雨は浮舟の行方を知らせてくれた雨であり、これも返歌

に書かれた「身を知る雨」と一致する。以上見てきたように、「浮舟」巻における二首の返歌は、句宮と薫の視点から見れば、浮舟の行方がそれぞれにどうなるかを予告していると言えるのではないだろうか。

■浮舟失踪前後の雨

次に第二段階、浮舟が失踪する前後の雨を見てみよう。

「蜻蛉」巻の冒頭で、浮舟が失踪した翌朝に、母君から浮舟宛の手紙が宇治に届いた。

いとおほつかなさにまどろまれはべらぬけにや、今宵は夢にだにうちとけても見えず、ものにおそはれつつ、心地も例ならずうたてはべるを、なほいと恐ろしく。ものへ渡らせたまはんことは近かなれど、そのほど、ここに迎へたてまつりてむ。今日は雨降りはべぬべけれど。

（蜻蛉 二〇一〜二〇二頁）

母君が手紙を書いた時は、雨が降ってきそうな空模様だったが、手紙が宇治に届いた時には、雨は降っていたのか。「蜻蛉」巻の記述からは推測できないが、「手習」巻にある僧の発言を見れば、雨が降り出す時間がわかる。

（僧）「雨いたく降りぬべし。かくておいたらば、死に

はてはべりぬべし。垣の下にこそ出ださめ」と言ふ。
(中略) この大徳して抱き入れさせたまふを…(中略)
「物の変化にもあれ、目に見ず見す、生ける人を、かかる雨にうち失はせんはいみじきことなれば」など、心々に言ふ。

(手習 二八四～二八五頁)

「雨いたく降りぬべし」から、雨が降ってきそうだがまだ降っていないのか、降っていてこれから激しくなるのか、判断は分かれようが、「かかる雨にうち失はせん」とあるため、浮舟が救助された時、雨がすでに降り出していると推定できる。匂宮の使者として、時方が宇治に到着したのは、浮舟が失踪した翌日であり、母君の手紙が宇治に届いた後である。時方が到着した時、「雨すこし降りやみたれど」と記されているため、浮舟が救助された夜に降り出した雨は、手紙が届いた時点でまだ降っていると見られる。

その後、母君も宇治に到着し、浮舟の失踪を知らされた。到着時、雨が降っていることが記述されている。

雨のいみじかりつる紛れに、母君も渡りたまへり。

(蜻蛉 二〇八頁)

ここまで検証してきたように、『源氏物語』における雨は、「予告」、あるいは「知らせ」の性質を持っている。母君が

手紙を書いた時、雨が降ってきそうな様子が濃厚だったが、雨は降っていないかった。その時、母君はすでに浮舟の死を予感していたが、これからどうなるかはわからなかった。母君が宇治に着き、浮舟の失踪を知った時、雨は降っていた。母君が浮舟の入水を知る経過は、雨の進行と完全に合致しているのである。

浮舟が救助された直後に雨が降り出していることは、僧都などの当事者しか知らない。宇治の人々が浮舟の失踪を知ったのは、入水翌日の夜明け前であり、その時に雨はすでに降っていた。すなわち、当事者ではない匂宮から見れば、浮舟は雨の中に消えたのである。これは前述したように、「かきくらし晴れせぬ峰の雨雲に浮きて世をふる身をもなさばや」という匂宮への返歌と一致していると思われる。

■浮舟が小野に移された後の雨

最後に、浮舟が小野に移された後の雨を検討する。「手習」巻で、「雨など降りしめやかな夜」という語句は、二回にわたって用いられる。一回目は、横川僧都が明石中宮に、浮舟救助の経緯を語る時である。

雨など降りてしめやかなる夜、召して、夜居にさぶらはせたまふ。

(手習 三四四頁)

この夜、明石中宮は僧都から浮舟救助と出家の経緯を聞かされた。僧都が話した人物は、宇治で失踪した女であると明石中宮は推定したが、具体的にどのような身分の人なのかは知らなかった。だが、僧都の話が、薫と親しい関係を持つ小宰相の耳にも入ったため、「浮舟が生存し、出家している」という確実な情報が、はじめて当事者以外の人に知られることになった。

二回目は、明石中宮と薫が語り合う時である。

雨など降りてしめやかなる夜、後の宮に参りたまへり。

(手習 三六二頁)

薫と中宮の話が終わった後、小宰相は中宮から、浮舟の情報を薫に伝えるように指示された。薫は小宰相から話を聞き、浮舟の生存と出家を知る。「雨など降りてしめやかなる夜」と描かれた二回の雨は「知らせ」の性質を持つ、浮舟の境遇と関わるものであり、「つれづれと身を知る雨のをやまねば袖さへいとどみかさまりて」の「身を知る雨」と照応する雨である、と思われる。浮舟は雨の日に起きた出来事に触発されて入水を決意し、雨が降り出した夜に救助され、雨の夜に小野での生存と出家が外部の人間に知られる。浮舟の失踪にまつわる物語は、雨によってつなげられ、閉回路の構造をなしている。

宇治十帖における雨はこれで完結するが、なお問題が残る。浮舟を女主人公とした「東屋」・「浮舟」・「蜻蛉」・「手習」・「夢浮橋」巻の中で、「夢浮橋」巻は唯一雨の記述がない巻である。「夢浮橋」巻では、浮舟に関して、「予告」と「知らせ」が両方とも行われていないからではないかと思われる。薫は比叡山を訪れ、浮舟について横川僧都にさまざま訊き、横川僧都も浮舟発見以来の始終を薫に話したが、二人とも、新しい情報を得ることができなかった。例えば、僧都は浮舟を発見した当時の状況について、

(僧都)「親の死にかへるをばさしおきて、もてあつかひ嘆きてなんはべりし。この人も、亡くなりたまへるさまながら、さすがに息は通ひておはしければ、昔物語に、魂殿に置きたりけん人のたとひを思ひ出でて、さやうなることにやとめづらしがりはべりて、弟子ばらの中に験ある者どもを呼び寄せつつ、かはりがはりに加持させなどなんしはべりける。なにがしは、惜しむべき齢ならねど、母の旅の空にて病重きを、助けて念仏をも心乱れずさせせむと、仏を念じたてまつり思うたまへしほどに、その人のありさまくはしくも見たまへずなんはべりし。

(夢浮橋 三七六頁)

と語ったが、傍線部は明らかな嘘である。僧都が浮舟を助

けたのは、昔物語にある魂殿の話の思い出したからではなく、「残りの命二日をも惜しまずはあるべからず」（手習二八五頁）と思ったからである。また、横川僧都は、浮舟の様子をよく見ていなかったと言っているが、実際は、浮舟のために加持を行い、浮舟をよく観察していたはずである。このように、僧都は真実と偽りを混ぜながら薫に話をしているのである。

一方、薫も僧都に対して似たような態度をとる。例えば、薫は浮舟の身分について、

なまわかむどほりなどいふべき筋にやありけん。

（夢浮橋 三七八頁）

と僧都に話した。薫は無論、浮舟の身分をよく知っているが、僧都に対して過去推量の助動詞「けむ」を使い、明言を避ける。薫と僧都は、できるだけ真実を隠しながら、相手の真意を探ろうとしている。結局二人とも新しい情報を得ることができず、新しい情報に伴う「知らせ」は行われなかった。加えて、薫と浮舟の再会が実現できないまま「夢浮橋」巻が終結してしまうため、「浮舟」巻以来の物語と連動するストーリーがない。そのため、雨は設置されず、「浮舟」巻から「手習」巻まで流れてきた一連の雨が、「夢浮橋」巻で断絶してしまっただろうと考えられる。

おわりに

以上のように、本論では、『源氏物語』における「予告」と「知らせ」の雨について検証してきた。「予告」の雨とは、これからのようなストーリーが展開されるのかを予告する雨である。「知らせ」の雨とは、読者にとって既知のことを新しい情報としてはじめて作中人物に知らせる雨である。もちろん、『源氏物語』における雨は、すべて「予告」と「知らせ」の機能を持つとは限らない。ただ、本論では、作者が綿密に設置した「予告」と「知らせ」の雨によって、関連性を持つ異なるストーリーがうまくつながり、最終的に「閉回路」のような構造を呈すると、結論付けたい。

注

(1) 用例数の統計は、<http://www.genji.co.jp/kensakuhm>を参照した。

(2) 藤村潔「源氏物語蜻蛉巻の降雨」（『藤女子大学国文学雑誌』第六六号、二〇〇一年）はその一例である。

(3) 「海竜王」と「住吉の神」については、井内健太「源氏物語」須磨・明石巻の天変」（『国語と国文学』二〇一八年二月号）が詳しい。

(4) 「さまとも見えぬ人」については、『新編日本古典文学全集』は、「神か仏か鬼か霊か、何とも正体の知れない人。次の明石巻の

住吉の神の神意を明石の入道に伝える夢の中の者の言葉から、この「宮」は、海神である住吉の神殿であることが推測されることが注す。

(5) 「後朝の文は翌朝早く送るのが普通で、夕方になったのは、源氏の熱意のなさのほどを物語る」(『新編日本古典文学全集 源氏物語』①「二八六頁、頭注二」)。

(6) 原岡文子「雨・贖罪、そして出家へ」(『源氏物語の人物と表現 その両義的展開』翰林書房、二〇〇三年)

(7) 三田村雅子「濡れる身体 宇治―水の感覚・水の風景」(『源氏研究』第二号、翰林書房、一九九七年)

(8) 前掲注(6)論文に同じ。

(9) 前掲注(7)論文に同じ。

(10) 針本正行「身を知る雨」表現史論——『古今集』・『伊勢物語』・『和泉式部日記』・『源氏物語』を中心として(室伏信助編『伊勢物語の表現史』笠間書院、二〇〇四年)を参照。

付記

▼『源氏物語』の本文引用は、以下の注釈書に拠り、巻名とページ数を記し、私に傍線を施した。

阿部秋生ほか 校注『新編日本古典文学全集 源氏物語』全六冊(小学館)

▼『源氏物語玉の小櫛』の本文引用は、大野晋・大久保正編『本居宣長全集』(筑摩書房)に拠る。

(ばく はくいん・本学大学院博士後期課程)